

第1回東海村「自分ごと化会議」全体協議 概要

参加者	<ul style="list-style-type: none">・会議参加者 18名・自分ごと化会議 in 松江の参加者 3名・谷口 武俊氏（東京大学名誉教授、公共政策大学院客員教授）・福嶋 浩彦氏（自分ごと化会議 in 松江実行委員会・共同代表、中央学院大学教授）
コーディネーター	<ul style="list-style-type: none">・伊藤伸（一般社団法人 構想日本 総括ディレクター）

■自分ごと化会議に参加したきっかけ

- ライフプランナーの仕事をしている。出身は東京で10年くらい前に東海村へ来た。妻が生まれ育った東海村はどういうところなのかと見ていて、原子力の問題が色々あって興味を持ち、勉強がしたかった。皆さんの意見を聞きたかったので参加した。
- 建設業関係で東海村の原子力発電所の仕事をしたりもしているので、原子力発電はとっても身近なもの。今回はこういう場をいただいて本当に感謝している。
- 仕事は原子力機構。この話を聞いた時、自分ごと化会議という言葉を初めて聞いておもしろい取組みだと思った。自分の意見を言って、皆さんの意見を聞ける場があることが自分にとって貴重だと思う。皆さんの意見を聞いて、自分の何か考えが出てきたら意見交換できればいいなと思っている。
- 会社員をしている。通知が来た時に「当たった」と思い、気軽に何も考えずに、すぐに返事をした。純粋に、皆さんの意見を聞きたいなと思っている。
- 会社員をしている。東海村で原子力に親しんで生活してみて、なんとか産業が欲しいという切なる願いからこの会に参加した。
- 人前で話すことは得意ではないので参加するか悩んだが、もうこうしたチャンスをいただくことはないかもしれないと思い、参加した。3歳の子供がいるので、なんとか安全に生活していくように、この話し合いに携わることができればと思う。
- 会社員をしている。原発問題は身近で、自分の意見をきちんと言いながら、皆さんの意見もきちんと聞いて、自分の考え、視野を広くしていきたいと思う。
- 原子力機構で働いている。参加は失敗したかなと思ったが、原子力に関して、貢献しないといけないと思い、参加した。皆さんの意見を真摯に聞きたい。
- 15年くらい前に東海村に来た。原子力関係の仕事はしていない。自分ごと化会議に当選したときに思ったのが、自治体で話すにはテーマがかなり大きいということ。テーマが大きすぎて、一国民にできることはほとんどない。それによって国が変わることはな

いかなど悲観的に考えている。そういう考え方を持っていたので、会議に参加して自分の考えがどう変わるのは楽しみにしている。皆さんと議論して自分の考えを深め、原発問題を議論できるようになりたい。

- 原子力機構で働いている。会議に参加したきっかけは、昨年のJCO臨界事故20年記念フォーラムで、福嶋さんの話を聞いて、構想日本の自分ごと化会議が素晴らしいと思った。このくじに当たった瞬間に、実は奥さんにあたったが、天からの賜りものだと思い、大いに喜んだ。熟議民主主義が本当にこの世の中にあるとは思えなかった。原子力というテーマについて、立場を超えて話し合える奇跡の場があるということ事態が大変喜ばしく希望を感じている。
- 大学生をしている。原発については知識もないし、普段から考えたこともなかつたので、話についていけるかどうか不安だったが、勉強になるかなと思い参加した。
- 祖父は水力、父は火力から原子力、主人は原子力から廃炉のところに携わってきて、エネルギーの変遷を、家族を通してなんとなく垣間見ているような気がしている。エネルギーのこれからということで、どういう変遷を辿るのかを皆さんのご意見を聴きながら勉強したい。
- 東海村には原子力があって、それで私たちは生活しているんだなと考えていた。色々な立場に立って、皆さんがどういうふうに考えているのか、自分も色々と考えていけたらと思い、参加した。
- こういう会への参加は消極的だったが、一步踏み出してみようと思い参加した。
- 昭和40年に東海村にきた。当時は本当に田舎町だった。暗くて懐中電灯が必要だった。こんなに都会的な町になるとは思っていなかった。これも原子力関係のあるからかなと思う。しかし、今は考えが180度変わり「本当に原子力はそんなに良いのかな」という考えになった。周りの災害をみても、答弁の仕方が「想定外です」と必ず言う。東海村の村長はそういうことを言わないように、我々の意見を少しでも聞いていただければと思う。1000人から抽出されたせっかくの機会なので、皆さんのご意見を拝聴しながら自分ごととして考えていきたい。
- 歯科衛生士をしている。「10キロの米から1粒くらいで当たったからいいんじゃない」と夫に言われて、気軽に参加した。皆さん意気込みもすごくて大丈夫かと正直思ったが、ちょくちょく参加できたらいいと思っている。
- 何も考えずに面白そだから参加した。参加を決めた後に考えたのは、単純に原発に対する思いは、恐いという恐怖心が大きい。この会議に参加して自分が何に対して恐怖を感じているのか、何かあった時にどういう行動をとればいいのかを考えられればよいと感じた。
- 仕事は原子力関係の会社。他の人の意見を聞くことがないので、皆さんのお意見を聞きながら自分のためになるのかなと思った。
- 私の夫が原発関係に勤めている。手紙が送られてきて、当たったから参加した。

■自分ごと化会議 in 松江での議論について

※以下は全体協議の間に行われた、コーディネーター（伊藤伸）と自分ごと化会議 in 松江の参加者（3名:松江 A～C）、福嶋浩彦氏とのオンラインディスカッションの議事概要です。

伊藤：自分ごと化会議 in 松江は原発をテーマに、無作為に約 2000 人を抽出して応募のあった 21 名が議論に参加した。本日は、当時の議論に参加した 3 名にオンラインで参加いただいている。まずは自己紹介していただきながら、会議に参加しての感想と会議後の 2 年間で意識や行動に何か変化があったのかを話していただきたい。

松江 A：最初は、聞いたことのない団体（自分ごと化会議 in 松江実行委員会）から案内が届き、どうしようかと思った。参加してみると、コーディネーターの伊藤さんがうまくリードしてくれて、忌憚のない意見交換ができた。是非の結論を出す会議ではないので、皆さん自由に意見を言って、なんとなく議論の方向性が出てきたことが、非常に有意義だった。参加してよかったと思う。

原子力に対する色々な立場・考えがあるが、会議後、私の会社では、必要なエネルギーを個人で賄えるように頑張らないといけないと思い、会社の建物に太陽光パネルを付け始めた。また、自分ごと化会議 in 松江が次は自然エネルギーについてやろうということで、今は実行委員会の手伝いもしている。

伊藤：自分ごと化会議終わった後に、会社で自然エネルギーを使っていこうと変えた？

松江 A：会議後、今年から、太陽光パネルを屋上に取り付けて、順繰りに各部屋の断熱回収をやっている。できれば、全部の事務所に付けられればと思っている。

松江 B：原発について話をする機会が、自分ごと化会議 in 松江までなかった。自分の思いは、自分の中に畳んでおく日々を過ごしていた。私の場合は案内が届く前にテレビでこの活動を知っていたので、届いた時に「やった、きたー！」とすごく嬉しかったことを覚えている。自分ごととして話せる場があるのはいいなと思い、参加した。身近な普段の集まりの中では、声の大きい人、しつこい人、発言の場を普段から持っている人、権力を持っている人の意見が通ってしまうと感じている。しかし、自分ごと化会議では、全員に話す機会が与えられているし、誰の意見も尊重されて貶められたり、批判されたりしない。本当に安全・安心な場をつくっていただけた。そこに感激した。

会議では、原発について多様な意見を聞きながら、「自分でできることは何か」「地域でできることは何か」という問い合わせによって自分ごと化されていく。今の自分に何ができるのかを考える機会をもらえたと思う。誰かがやってくれるのを待つのでは

なくて、自分で何ができるのかを考えさせられた。

私は今まで原発のことを話さなかつたし、自分が思っていることも発信してこなかつた。会議が終わってから、そういう問題を避けるのではなくて、生活の中で少しずつ色んな人に発信していく機会を増やしてきたと思う。

私も現在、第2期自分ごと化会議 in 松江の実行委員会に参加して、和気あいあいとやれるので楽しい。ただ、行政から全然サポートしてもらえない中で、自分たちで会議を作るのは、お金がかかる作業だと身に染みて感じている。

伊藤：第2期という話がでているので、自分ごと化会議 in 松江実行委員会の共同代表である福嶋さんから第2期の話を願いしたい。

福嶋：第1期は原発をテーマに自分ごと化会議を開いた。続けることが大事だと、実行委員会のみんなが思ったので、来年2月の開催に向けて第2期の準備が始まっている（テーマは自然エネルギー）。市民が主催で開くので、選挙管理委員会の有権者名簿から2000人を抽出する作業をし、案内を送っている。現在、返事が返ってきているところ。会議に参加する住民は、1期目とは違う人が2期目に参加する。

2期目の特徴の一つは、原発をテーマに話し合った1期目の会議参加者が、今の2期目の実行委員会に加わっていること。今回、オンラインで参加していただいている3名もまさに中心となってやってくれている皆さん。東海村は行政主催だが、会議が終わった後も、参加者のつながりが東海村でも出来てきらいいなと思う。

松江C：（実行委員会から）夏に怪しげな案内が届いた時は、ちょうど子どもの部活動が終わり、そして保護者としても応援にかけていた力も終わり、燃え尽き症候群になったところだった。開封して中身を見て、これはもしかして神様が与えてくれたチャンスだと思い、原発という単語はその時あまり意識していなかったが、参加を決めた。原発は松江市でも色々なところで話題に上るが、子育てをして、家事をして、働きながらだと忙しくて、あまり原発について考える余裕がなかった。これまで子供中心、家庭中心で物事を考えていたが、これからは自分で考えることも大事なんじゃないかと思い、参加に「○（まる）」をつけた。

会議に参加して、自分の視野が広がった。色々な考え方を持った皆さんの話を聞くことで自分が成長できる。「人生100年の時代、いろいろ話を聞いて自分が成長できる機会を増やしていきたい。」そんなことを思い、私も第2期のお手伝いをしている。

第2期で議論する自然エネルギーについても、勉強しなければと思い、新聞やメディアなどで情報を集めるようにしている。これももしかしたら、自分ごと化なのかなと思う。会議に参加することによって、自分ごと化する習慣付けができ、それが自分の成長に繋げられている。

皆さんまだ初回なので、どうしていいのかわからない状態だと思うが、原発の話に

して言うと、私は今でも答えは出でていない。ただ、「いいのか。悪いのか。」はまだ出てなくともいいのではないか、自分の中で考え続けるのが自己ごと化なのではないか、と思っている。

伊藤：皆さん、自己ごと化会議に参加したことによって色々な意識の変化があった。その中でも、原発に関して考え方を変えた人はいますか？

松江 A：会議前までは「国が決めたことに肅々と従う。」ということだったが、そうではないと思った。やはり将来のエネルギー政策をみんなが考へないといけない。国が決めてくれるから何とかなるという時代ではなくなったと、福島事故を経て感じ、そして自己ごと化会議に参加して、よりそういう考えになった。そういう意味では自己ごとになったかなと思う。私も結論は出でていませんが、何十年か先には全く違う状況になっていると思っているので、今、自分ができることをやっていこうと考えている。

松江 B：自分の中だけで「原発はあんまり良くないな、もっと違うものがいいな」と思っていた。対処の仕方が見つかっていないのに、子や孫にそのツケを背負わせていくのは嫌だと考えていた。そうした原発についての考え方は変わらないが、そのことを周りの人に話すことや、自分の思うことを発信する機会があれば発信するようになったのが変化だと思う。

福嶋：私も、自分の変化の話をしたい。私はずっと脱原発の人と、推進の人がちゃんと話し合わないといけないと思っていた。脱原発の人へ「脱原発の人たちだけで集まって意見を言い続けても、脱原発にはなりませんよ。両方が話し合わないと。」と言っていた。それは半分間違いだと気が付いた。

賛成と反対、両端の人が話すと意見を言い合って、平行線で終わることが多い。賛成、反対、そして無関心と、3つに分けることが多いと思うが、実は「賛成の人」と「反対の人」と、今はどちらの立場でもないけれども、正確な情報を得て自分で考えたいという「真ん中の」人がたくさんいる。真ん中の人は10人いたら10人の立場がある。「真ん中の」人たちが中心に話し合って、両端の人もそこに加わって、みんなで信頼関係を作り、話し合うことで初めて、社会的な合意が見えてくる」と思うようになった。

みんなで信頼関係を持って話し合った結論は、もし問題があっても、またみんなで知恵を絞って修正していく。従来は、賛成の人と反対の人が戦い、どっちかが勝って結論が出る。どっちかが勝って、相手を負かして出した結論は、後で問題がわかつても、勝ったほうは問題を認めない。認めると今度は自分が敗者になるからだ。そうした戦いの結果の結論ではなくて、みんなで話し合って信頼関係を持ち、合意した結論、そういう修正可能なやわらかい社会決定こそ、リスクの一番小さい社会を作るので

はないか。

自己ごと化会議に参加される方の多くは真ん中でそれぞれの立場をもって考えている方だと思う。松江もそうだった。やわらかい結論を出していけたら、社会はもう少し良くなるなど、私の考え方は少し変わった。東海村の会議もそういう場になってもらえるととっても良いなと思う。

■現時点で原発について感じていること

- 原発はあるのが普通だったので、本当にずっとそばにいるのが普通。特に考えてなかつた。
- 地域貢献ではないが、地域のためにこれからも、人の雇用の面もあるので、今後も継続していただければと考えている。
- 私は単純に恐いというイメージ。
- 正直な話、子育てなどで、日々が精いっぱいなので、今の時点では原発について何か考えるとかはない。
- 過去は、原子力はいいなと思ったが、最近はそうでもなくなった。福島の現状を見た時に、どんどんたまる黒いフレコンバックや、水の処理もどうするのか。安全の対策を現時点でやれることはやっているが、廃炉にした場合の措置、計画がされていないなかで、つくるだけつくっていいのかと感じている。
- 恐怖がある。子どもたちのこと、子孫のことを考え、また福島を見て、土地にも住めなくなると考えると怖いなと思う。だけど、先人の方が「東海村が発展するためには必要だということで原発を」ということだったようなので、これから恐怖だけではなくて、将来のことを考えて、「安全なもの」というのをもとに継続するのかを考えていかないといけないのかなと思った。
- 現場で働いている職員の皆さん、本当に国の基準に従って一生懸命にやっている。賛成、反対抜きにして、職員の皆さんには頑張ってほしい。
- 生まれた時からずっとあったので、あることが普通だなと思っていた。自分で普段からあまり考えることもないし、周りの人ともそういうことを話したことないなって感じている。
- 東海テラパークで、建屋の構造を勉強すると興味深く、そこには深い技術があり面白い。ただ、そういうロマンだけではなくて、処理をどう考えるのかを考えないといけない。テラパークは、廃炉へのビジョンを示したものになっているかというと、そうなっていないと感じた。
- 原発については恐いという気持ちがある。ただ、原発があるおかげで恩恵を受けてきた事実がある。ただ、第2原発は古いので恐い。できれば最新式のリスクの低い、事故が起きにくい原発に早く立て替えてほしいと考えている。
- 原発は異論、批判がありながらも今残っているということはやっぱり必要であるということではないか。色々なリスクがある中で、なければいいのかもしれないが、原発は

まだ必要だから、こうした議論がなされているのだと思っている。

- 新規制基準に対する工事をしているということで、これらは国の許可ももらっていると思っている。リスクがあるにしても、私たちもそのリスクを理解する必要があると思っている。
- 電気を使わないと生活していけないので、原発に代わる自然エネルギーなどがもっと確立してこないと、原子力を使わないようにできるようにはならないと思う。子どもたちの将来を考えると危険性の高いエネルギーは使わないように段々してほしい。東海村に本当にずっと長く住んでいきたいので、安全だけは保障していただきたい。
- 原発に関しては、中立な立場。考えないといけないのは、原発がなくなったら電気をどうやってつくっていくのか。現時点では火力発電がメインになっているが、二酸化炭素の排出問題が絡んでくると思っている。原発の賛成、反対どちらもいると思うが、どちらも正しい意見だからこそ、難しいと思っている。
- せっかく電気をつくるものがあるので、使っていないのはもったいないなど単純に思っている。太陽光発電も進めていただいて全然良い。大事なのは、色々な手段を持っておく多様化が必要だと思っている。一個だけに依存するのは危険。新しい安全な建物を造るべきと思っている。また、皆さん自分ごとに考えるならば、選挙に行って、自分の権利行使してほしいと思っている。
- 自分は安全対策をしっかりしてもらった上で、再稼働してもらうのは良いと思っている。しかし、安全対策ということが謳われるが、将来世代への責任を考えた時に廃炉、核のゴミに関する議論が、電力会社から出てきていない現状があると思っている。長く住み続けるとか、子ども世代に負担を残さないことを考えた時に、原子炉の安全対策だけでなく、核のゴミに関する話も責任をもって考えていくことが必要。
- 原子力については福島原発事故のインパクトが強かった。せっかく人間が考えてきたもの、車や飛行機がいくら事故を起こしても安全を追求することで続けてきていることを考えると、原子力がいきなり廃止はどうかと思っている。安全というのと、追求しながらも原子力はCO₂削減という意味でも結構重要なポイントだと思っている。再生可能エネルギーを進めていく上で、原子力との比率を変えていくのもありではないか。徐々に変えていくことも考えることが必要ではないか。
- 結論から言うと賛成でも反対でもない。いや少し賛成よりかなと思う。思うのは、東海村がこの先どうあっていきたいのか、どういう村にしていきたいのか、ここでどういう子どもを育てていきたいのか、そういういった東海村のビジョンみたいな、その中で「原子力があったほうがいいのか、ないほうがいいのか」それが大事なのではないか。原子炉があることによって恩恵もあることは確かなこと。これだけ豊かなインフラで東海村は良いところだなと思っている人も多いと思う。原子力の是か非かというよりも、「東海村をどういう風にしていきたいのか」の中に、原子力がどういうふうに組み込まれるべきか、あるいはいらないのか、そういう観点からの話のほうがいいのかなと思っている。やや賛成というのは、メリットというと冷たいかもしれないが、地域に貢

献している部分の方が今は大きいと思っている。

■その他、知りたいことなど

- 原子力規制委員会がどれだけ信頼できる組織なのか分からぬ。それを知っている人がいれば。
- 原子力に関係する交付金や補助金は、東海村にはどのくらいきているのか。それは東海村の予算の中でどれくらいの割合なのか。
- 周辺の市町村がどう考えているのか。
- 司法との関係。
- 原発は、東海村にどれくらいの経済効果があるのか。

■第1回のまとめと第2回以降について

伊藤：本日の議論を踏まえて、次回と3回目の中で、廃炉計画のこと、原発があることによるメリット（財政面や経済効果など）は何かということを原電または村役場からまず説明いただきたい。さらに、原発のデメリットについても議論したい。デメリットを考える上では、例えば「再生可能エネルギーで、エネルギーを100%賄える」という環境になった時に、「原発はいらない」と考えるのか、「いや、それでも原発はエネルギーの多様性の一つの手段としてあったほうがいい」となるのかは、人によって違うと思う。そのような議論の中で、本日ご意見があった「どのような東海村に住みたいか、どうありたいか」に繋がってくると考えている。「どうありたいか」はどのような議論にもつながるテーマと言えるだろう。

今日から次回に向けて、今日の議論や原発について周りの人に話してみて感じたことがあれば、是非話していただきたい。また、先ほど話した次回議論したい内容から、皆さんの話したいことがはみ出してしまっても全然問題ない。

福嶋：今日の議論を聞いていて、松江よりもさらに原発を自分のものとして普段から感じている方が多く、今後の議論もそこから始まると思った。松江と状況が少し違うとは思うが、自分ごと化会議 in 松江の会議参加者、傍聴者、実行委員会の全員が持った感想は、「原発のことをこんなに自由に、自分が本当に思っていることをみんなの前で安心して話せる。こんな場が松江に生まれるなんて思ってもいなかった、考えもしなかった。」というものだった。それ以上の場に、東海村の自分ごと化会議はなるのではと、ひしひしと感じた。

伊藤：皆さん「最初なんだかよくわからないなー」と思いながらも、それぞれお話をいただいた。その中で「絶対こうだ」という断定的に話された方は一人もいなかった。先ほど話にあったが、真ん中の人、賛成、反対も間違っていないからこそ答えを出すのが難しく、だからこそ、私たちは考えていかなければいけない。

この場で意思決定をするわけではない。様々なことを考えていく材料を、役場として、最終的にこの場の意見を含めて色々な人たちの意見を踏まえて意思決定をしていくことになる。この後も迷いながら色々な意見が出てくると思うが、結果的に終わった時に、皆さんに「来てよかったです」と思っていただけるようにしたいと思う。